二〇一七年一〇月一三日

美術展牛歩の列につきにけり　せいじ
新米を支へて運ぶ布袋腹　うつぎ
白鳥の二羽睦みゐて池ゆたか　はく子
神馬引く男真白き祭足袋　なつき
家居よし木犀の香に包まれて　菜々
夕陽燃ゆ見渡すかぎりすすき原　みどり
田仕舞の煙幾筋山ぼやけ　ぽんこ

二〇一七年一〇月一二日

神杉をこぼるる日矢に落葉舞ふ　明日香
草庵の茶室へ石蕗の花明かり　たか子
若木にもしかと菰巻城の松　たか子
並べ売る泥つき野菜野路の秋　智恵子

二〇一七年一〇月一一日

木の実落つ城の二の丸三の丸　宏虎
陽を返し白銀となる秋の川　明日香
香り立つ朝の珈琲小鳥来る　うつぎ
揺れやまずカメラ泣かせの秋桜　たか子
愛犬の鼻に尻尾にいのこずち　さつき

二〇一七年一〇月一〇日

運動会招待席に忘れ杖　宏虎
芋掘りの園児ら土に大はしゃぎ　智恵子
山の色つるべ落としの日に失せる　満天
天高く直立したる飛行雲　みどり
武蔵坊少し痩せしと菊足しぬ　宏虎
露天湯に四肢を伸ばせば秋の声　たか子
雨の稲架脚踏んまへて撓みけり　うつぎ

二〇一七年一〇月九日

秋天へ千手を翳す楠大樹　やよい
トロッコ車野山の錦満喫す　恵三
子規病みしてふ間に座せば秋寂ぶる　なつき
秋の蚊の両手ふさがる吾の頬に　明日香
稚魚群るる水草紅葉隠れかな　たか子
無住寺の古りし蹲踞小鳥来る　宏虎

二〇一七年一〇月八日

枯山水粧ふ遠嶺借景に　ぽんこ
途中下車して豊秋の畦歩く　智恵子
秋冷や旅の足湯にほつこりと　はく子
里のカフェ秋草叢に囲まるる　やよい
おしやべりも愉し小川の芋洗い　智恵子
鵙猛る塚の安珍悼めとぞ　やよい
秋さぶや夕闇つつむ山の寺　みどり

二〇一七年一〇月七日

松籟かはた潮騒か寝待月　宏虎
廃線の鉄路を隠す草紅葉　さつき
新豆腐富士の名水なればこそ　恵三
濯ぎ場へなぞへの小径蓼の花　菜々
はち切れんばかり袋の今年米　よう子

毎日句会みのる選・二〇一七年一〇月一五日